

## 障碍者として 日本の地で芸術を創る

講演要旨

金満里先生 (劇団「態変」主宰・芸術監督)

### 人間とは何か

アンニョンハセヨ。金満里です。今日、朝鮮奨学会の学生のみなさんの前でお話をする機会を与えて頂いたことを非常に光栄に思います。

今、『劇団態変の軌跡』という映像を見てもらいました。その間、私はみなさんがこの映像から何を感ずるのかなと思ひ、その表情を見ていました。みなさんはこれまで、障碍者を直視するという機会が、それほどなかったと思います。初めは「これ表現？」という感じがしませんでしたか。みなさんが思っている舞台表現は、格好が良くてきれいで見やすいもの、それとは全然ちがうでしょう。何をしようとしているのか分からない。ただ私は重度寝たきりの身体表現がすごく大事だと思つて居るのです。みなさんの概念がない、今まで舞台で表現するイメージが通じないという存在として舞台の上でござる、うねうねしたいわけです。私は在日コリアン二世として1953年に生まれ、二世のオモニに

育てられました。今もそうです。障碍者はすぐかわいそうで見られないと言われ、ましてや舞台上で表現することや人前で身体、障碍をさらして何かつくっていくことは、考えられない時代でした。

今も変わらないと思つるのは、2年前に神奈川県相模原市の障碍者施設で起こった19名の障碍者が一人の元職員(健常者)によって殺された事件です。戦後最悪の大量殺人事件として日本社会に衝撃を与えました。あの事件から世の中が変わったかという点、全然変わっていない。変わっていないどころか、もしかしたらこの日本社会は、もっとひどくなつて居るのではないかとこの感じが強くするのです。

私が劇団「態変」という、アバングヤルドでみんなが想像のつかない身体芸術を始めすでに35年になります。先ほど映像を見ながら言いましたが、私が35年間何を信念にやつて来たのかというと、それは人間の基本です。人間とはこういうものだということを実は健常者の主眼でしか考えていないのではないかとこのことです。人

間にはもつと広い定義があるはず。人間とは何かということから本当は掘り起こさないといけないのに、知らないうちに人間とは五体満足という言葉で当たり前に受け止めてしまつています。その感覚は違ふという視点を私は持つていてそれを伝えていきます。



photo by bozzo

違ふ視点からの世界があつて、違ふ立場から見ると全然違ふものが現れてきます。それを舞台上で表現すると、それまで気付かなかつたことが見えるじゃないですか。「ああ、何これ」と思ひながら「そういう見せ方がある

のか」とか「そういう転がり方があるのか」とか、普段健常者だけで生活していたら障害者が転がることや、障害者が自分でご飯を食べるために嘔むという動作が見えないようになっていまして。ただ、食べるとか、どこかへ行くとか、何かしたいという気持ちから起こるやり方が違うというのは、ものすごく大事なのです。

違うということを自分の中へ取り入れていくと、今までこれが普通だと思っていたことや、当たり前だと思っていたことが変わって見えてきます。それを知ると、とても違う発想になります。みなさんが大学で学び社会に役立つ人間になろうと思う時、どのような考え方が、発想をするのか。そこで揺さぶられる体験は、広がり、深まり、新しい考えが生まれてきます。そういう意味で、私は大学生の人たちとの関わりを大事にしています。

## ◎「障害は悪いこと」

私の母は第二次世界大戦の前、ちょうど満州事変があった時代に日本に渡ってきました。古典だけを

演じて日本中を巡業する劇団を立ち上げた座長でした。朝鮮語や歌舞踊楽曲を奪われた時代に、日本でその劇団が活動していたこと自体がものすごい驚きです。古典しかやらないということを買いて、強制連行されて日本にきた炭鉱労働者のところに巡業して公演を行っていたのです。時代が厳しくなると、チマチヨゴリを着て『春香伝』とか古典の物語をやったら私服の憲兵が捕まえに来ます。自分が舞踊を舞っているときでも、幕を下ろされ、「これほど惨めなこととはなかった」という話をよく母から聞かされました。

非常に気骨で民族意識を持っていた母は日本で巡業しながら戦後を迎え、私を一番末の10人目の子どもとして生みます。母は、私が小さい時から、「踊りが上手なこの子を跡継ぎにするのだ」と思っていたそうです。10人目にして跡継ぎの子どもが生まれたと思つた矢先、3歳のときにポリオという全身小児まひにかかります。母は、跡継ぎにと期待した娘が重度の障害者になり、自分はもう跡継

ぎを望めない、こんな不幸な人生になったと嘆きました。

そんな母の身世打令（人生の身の上話を語り聞かせる）を家でお客さんに語るのを何度も聞かされながら、私は障害とはそれほど悪いことなのかという思いでした。障害者になつた途端に跡継ぎにはできない。直接、「障害は駄目だ」と、言うつもりはないと本人は言うかもしれない。

うかもしれませんが、私は、障害者はすべての希望を失い、人生が奈落の底のような存在なのだということ、その言葉によつて自覚させられるのです。だから、障害があることは悪いことなのかと思つていましたが、その実感はありませんでした。自分の身体は自分のもので、自分の身体は自分変えられない、嫌いかかという以前の問題でした。

## ◎施設での生活

7歳の時、このままでは教育も治療も受けさせられず、障害もどんどん悪くなつてしまうということで、私にはまったく相談もなしにいきなり施設に入られます。その

時代は、日本にもようやく施設ができて、社会福祉という言葉もできてきます。

7歳から17歳という一番大事な時期を私は施設の中で育ちました。一応義務教育を受けることになり、3回の手術や治療も受け普通の障害児の人生が始まるのです。

施設の中で障害は手が悪い、足が悪いと表現します。障害は、悪いことだと徹頭徹尾教えられます。少しでも健常者に近づくと曲がっている足を真っ直ぐにします。健常者の中にもX脚の人がいますが、障害者の場合はそれがひどくて顕著に表れています。そういう足は良くない、真っ直ぐにしなければいけないと言つて手術されるのです。曲がついて不都合なことはないのですが、真っ直ぐにして健常者と同じようになることが治ることだと言われるのです。障害は悪いこと、少しでも治るようには訓練し、手術も受けるようにと親や周りの人たちは言います。特に親からは歩けるようになりなさい、歩きたいと思いなさいと教えられます。施設の中でそう思わな

い子は、努力しない子になります。筋力をつけるために滑車に付けた重りを数えながら上げる訓練をさせられますが意味がないのです。実際、筋力はつかないし、それで歩けるようになるかというと健常者がいきなり空を飛べと言われるのと同じです。大きくなるにつれ、こんな訓練をしても意味がないということが分かってきます。それでも訓練や手術が日々あるわけです。

洗面を済ませます。12時にお昼を食べて、夜は4時半に晩ご飯、9時になったら消灯する、その繰り返しです。その間に勉強が少しあります。重度の障害児はほとんど勉強をさせてもらえません。施設の中で見放されているのです。自分で立つて歩いて教室に行ける子だけが授業を受け、勉強ができます。自分から何かしたいと思ふことは一切駄目です。規則の中で職員がこなす業務を享受し、甘んじて受け入れるだけです。その度に「ありがとう」と言われるのです。障害者は職員にやつてもらふことしかできないのだから、せめて「ありがとう」くらいはちゃんとと言いなさい、そういう教育です。いかに障害者が駄目なのか、いかに重度障害者はどうしようもないのかということをお教えられます。私はその生活を10年間やりました。だから、何か自分から自発的にやりたいと思わない方がいい、何かしてくださいなんて絶対に言えません。職員は決められたこと以外は絶対にやってくれません。自分でやりなさい、それだけです。

業務という流れ作業の中に障害にも重度、中度、軽度のランクがあります。その程度に応じて自分の欲求や希望を一切持たないようにならないとだめだということを教えられるのが施設だったのです。その中で私は寝たきりではないのですが、最重度の部類でした。

児童施設では普通、重度の子は18歳までには退院し家に戻されず。私は施設に入ったときから早く退院したいと親が面会に来るたびに泣きついていました。でも10年間の生活で周りの障害を持つている先輩たちの将来が見えてくるとそんなこと言っても仕方がないということがわかってきます。ある重度の先輩は施設から出た後、親も面倒を見るために働きに出なくてはいけなかったので放置されて、自殺未遂をしてしまいます。自殺未遂をしたので、親御さんが「大人でも一生入れる施設はないですか」と言って施設に相談に来られました。その先輩は日本で初めてできた、成人した障害者が一生入れる施設を探して大阪の親元を離れて千葉県の施設に行かれました。

た。終身施設と言います。終身刑を受けたような言葉ですよ。私も自分の将来はそれしかないのだということがわかってくるのです。

私には高校、大学に行きたいという思いがありました。それが唯一自分をこの状況から脱却させる方法だと思ったからです。もっと広い世界を知りたいという気持ちから高校進学を言い出したのです。そうすると「重度の障害児が高校進学なんてどういふことだ」と、養護学校の教師たちがみんな反対するのです。中には露骨に高校入学を考えるよりも単純作業、軽作業、何でもいので、あなたが労働だと思えるように手に職をつけなさいと説得する教師もいました。私は子ども心に、自分の将来を「できない」とひとくくりにされ、進学もあきらめろと言われる、それはおかしい、とはっきり思ったのです。差別という言葉はまだ知らなかつたけれど、敏感に職員言葉に対しておかしいと思ったのです。

ある時、同じ部屋の子が職員とのちよつとしたやり取りができずに放置されました。寒い冬の朝、

重度障碍のその子は着替えが自分のペースでできず、着替えさせてくださいと言えなかったので職員に無視されました。その後、気管支炎から肺炎をこじらせ亡くなりました。他にもベッドから落ちて寝たきりになった子もいました。奄美大島出身の人で、家族は貧しい中でも面会に来ていましたが、寝たきりになってどんどん悪くなり、ある日突然転院させられいなくなり、その後、病気になるようになったと思います。

職員の扱いは今だつたらじめという短絡的な言葉を使いますが、その言葉も当てはまらないほど日常はひどい扱いでした。その中で何人もの友だちが亡くなりました。亡くなったことを話題にした職員に聞くことなどできません。だから重度障碍、寝たきりになればどれだけ非人道的な扱いをされ、差別を受けるのかを思いしらされることばかりでした。それに対して私はおかしいと思っていました。また、寝たきりの友だちがトイレに行きたい時にはいつも私が大きな声で職員を呼んであげまし

た。何度も呼んでいるうちに職員は「いい加減にしなさい。3回呼ぶところを1回にしなさい」とその子に怒り出します。それに対して私は「生理現象を我慢しろとはどういうこと、おかしい」と我慢できずに言います。寝たきりなのに我慢しなさいと平気で言える感覚はやはり職員、世話をする健常者側のエゴだし、邪魔くさいとか簡単に済ませたいとか、職員の気分では私たちは扱われず。私はそれには「おかしい」と言う子でした。

例えばテレビを見てもいい時間に職員の気分が悪いとテレビを消される、そういうことも許されず。私は怒り抗議します。黙って我慢しているだけでは済ませないということを行動で示すのです。私が高校へ行きたいと言った時も、重度障碍の子が高校へ行きたいなんて言うことはなかったの

で周りはびっくりしました。だけど職員は何の対策も取りません。考えを改めなさいと説得しに来るだけなので私は大人不信のかたまりになりました。

えが行きたいのであれば行かしてあげる」と高校の通信教育を受けることになりました。施設は17歳で出て、長兄におんぶされ通信教育のスクーリングに月一回通うことになりました。スクーリングでは、授業はしますが、普段は自分で勉強するのが前提でした。みんなは高校卒業の資格が欲しいだけでそんなに勉強はしません生徒間の交流もまったくありませんでした。大学に行きたいと思いましたが、私が大学で福祉を学びたい動機なんて結局は自分より重度の障碍者を自分が何とかしてあげたいと思う姿勢自体が差別じゃないかと思うようになり、精神的な深みにはまっていきました。

### 回 障碍者運動との出会い

その頃、障碍者の解放運動と出会います。この運動は言語障碍やアテトーゼという脳の運動神経の一部損傷による体のけいれんや硬直、震えなどの障碍を持つ脳性まひの人たちが起こした運動です。

その運動は、障碍者の隔離収容はやめろ、施設政策反対、施設や養

護学校を潰せなど非常に過激な主張をしていました。障碍者差別は、制度などを良くすることでなくなるものではありません。人間観を変えないと障碍者に対する差別はなくなりません。健常者の物差しで何か対策することでは、障碍者を認めたと本当の共生にはならないのです。

その運動体はものすごく辛辣で本質を突いていて、私が経験しても言葉にできなかった何か悶々としたものを、論理化し思想とする障碍者運動でした。

その運動体は障碍者が健常者と運動して動く集団をつくり、介護として体は貸すが頭は貸さない、障碍者のことは障碍者で議論し決める、健常者は介護として協力するボランティアではない友人組織だということです。私は嘘つばいと思いつつも、面白そうと感じて行くようになりました。

その運動体は、障碍者差別の根源は優生思想にあると批判していました。相模原事件の犯人が主張していたのも優生思想です。今、優生保護法があった時代に去勢手術をさせられた障碍者の人たちが

高齢になり国を相手取って訴訟を起こしています。

優生思想というのは、障碍の有無や人種などを基準に人に優劣を付け、人類をより優秀にするために不良な遺伝子を後に残さないよう優良と不良に分ける考え方です。

遺伝子は自然界の中では自然淘汰され、打ち勝つ生物だけが生き残るといのがダーウィンの「進化論」です。それを人間にあてはめて、理屈をつけ、ヒトラーのナチスドイツ

の時代に民族淘汰でユダヤ人をガス室に送り大量に殺害しました。

これも優生思想です。ユダヤ人をガス室に送る以前に人体実験したのが障碍者だったのです。同性愛の人たちも殺されたと言われています。またガス室を完成させる前に障碍者や途中で障碍者になった人、膠原病の人たちが殺され、T4作戦と呼ばれる安楽死政策の研究をナスがやっていたという詳細な歴史が最近わかりました。人類の悪の部分、そういう歴史が現実にあるのです。実際、在日コリアンだけでなく朝鮮というものにレットルが貼られて、日本の植民地支配当時のこ

とを振り返って言う人たちがいます。ヘイトスピーチを行う人たちの思想が頭をもたげて行動する世の中に今、私たちが生きています。そのとき障碍者はどうなるのか、それが2年前の事件です。あれだけ多くの人が殺されたにもかかわらず山奥の施設にいる障碍者が殺されたのだから関係ない。自分たちの生活に重要なことだとは感じていません。健常者のその現実を私は言っているのです。

今、世の中の感覚はより鈍くなっ

ています。健常者は普通に街を闊歩していることにも疑問を持たないといけないのです。普通に障碍者がいて一緒に生きようと車いすを押したり、カフェや映画館に友達としていく感覚があれば施設はなくなります。施設や養護学校など特別な場所で、障碍者が社会のお荷物とされている現実。それを作っているのは健常者であるみなさんです。

### 「劇団」の立ち上げ

運動の中で私は重度障碍者が普通に地域で生きるためには自分で介護者を使い、責任を持って自立生活をしないと障碍者解放と言えないと思ったのです。だから、親の大反対を押し切つて家を出て自立生活を始めました。その後、障碍者の運動を一段落終えた私は友達と一緒に沖繩に行きました。在日コリアンとして自分のアイデンティティを考えるためです。障碍があることで在日コリアンのコミュニティからは排除、差別されています。それは実感としてあります。施設に入れられ文字や言葉を習うことも奪われ、民族教育

を受けるなんて、最初からなかった時代です。だから、障碍者が自分の民族意識として何を持てるのかを考えたとき、沖繩が一番それに近いのかなと思ったのです。「大和」という日本の中で、独立国であった沖繩には米軍基地があり、アメリカと日本の間でいのように使われて翻弄されている。自主権、自立権を奪われ徹底的に日本の奴隷のように使われている。在日コリアンの立場で、本国を訪ねる、帰る勇気もなかった私は沖繩に行つてみようと思つたのです。

そして、八重山諸島の西表島に行つた時にある経験をしました。マリウドウの滝に行こうとしましたが、少し進むと障碍者の車いすではとても行けません。仕方がないので友だちを行かせて、私一人待つことにしました。大自然の中一人で怖いながらも景色を楽しむことにしました。すると目の前の大木にアリの巣がたくさん這い上がっているのが目につきました。それを眺めていると、ふと私の頭をよぎる思いがありました。それはアリも大木もそれぞれにこれが世界だと思ひ、



photo by bozzo

悠然とした営みがあるということでした。大木の世界にアリが含まれるといった大小の関係ではなく、独自の世界が互いとは関係なく絡み合っているという宇宙観のようなものが閃いた瞬間でした。

私にとってこの閃きは、それまでとは見えるものが大きく変わり、すべてが宇宙に生かされた存在なのだという喜びを充満させてくれるものでした。私はその時、確かに自分自身の中から湧き上がってくる活力を感じました。

私にとって沖縄は、夢によつて癒され、自然と宇宙とのつながりまで感じさせてくれるものになりました。この経験をきっかけに「私、舞台表現するかも」と思ったのです。

私が今、芝居の中で表現しようとしている破壊・浄化・再生という宇宙観との初めての出会いでもありません。健康者の形でなく車いすでもない、地面に転がりこの身体のパースで宇宙の中で本当に生かされているということを感じてありのままの身体で表現したらいいのだと思えたのです。

29歳で劇団「態変」を立ち上げました。「態変」は、身体障害者がレオタード姿で舞台の上をのたうちながら、自分の身体を表現に変えることで何か伝えたいものを創り出します。そういうレッスンを続けながら35年間健康者では発想できない芸術を打ち立てることができたと思っています。

みなさんは違うペースを持ち、違う視点で障害者と向き合い介護に入ってください。ヘルパーとか資格のある人だけが介護するのはなく、普通に市民が当たり前に

介護できるようにならないといけないとずっと主張してきました。

私が自立生活をした当時はヘルパー制度がありませんでした。

みんなボランティア、無償で介護に来ていました。今は介護が付くようになったのですが資格制度になつていきます。まるで専門家しか触れられない、それはやはり押し付けていると思うのです。

「障害者と健康者は一緒だ」ではなく、その違いを広げて面白いと思えるかが大事です。それを芸術活動で表現するにはすごい力がいりますが人間の価値を変える革命だと私は思っています。政治ではなく芸術が人間の役割、概念を変える力を持っていると思います。

### ～ 劇団「態変」とは ～

主宰・金満里により1983年に大阪を拠点に創設され身体障害者にしか演じられない身体表現を追究するパフォーマンスグループ。

「身体障害者の障碍じたいを表現力に転じ未踏の美を創り出すことができる」という金の着想に基づき、一貫し作・演出・芸術監督を金が担い、自身もパフォーマーとして出演する。

海外での招聘公演も数多く、特に欧州では「これまでのダンスの枠組みを大きく捉え返す必要のある表現に出会った」などの評価を受け、その斬新で先鋭的な芸術性へ触れる機会を求められている。

その方法は、身体障害者がその姿態と障碍の動きとをありのままに晒すレオタードを基本ユニホームに、障碍それじたいを表現力に転化して人の心を撃つ舞台表現を創り出す、それが劇団態変の表現である。

身体こそが身近にある小宇宙、として捉えるとき、不安定にも見える態変のパフォーマーの身体こそが、一瞬足りとも同じではない宇宙への感応の表現としてある。態変が表現する、ことは、生命丸ごとを投げ出すということに近く、生きる本能に目覚める身体性である。それは命の形、であり魂の表現なのだ。

◇公式サイトURL <http://www.ne.jp/asahi/imaju/taihen/>